



日本記者クラブ

総会記念講演会

川村元気 映画プロデューサー・小説家・絵本作家

2017年5月29日

26歳で映画『電車男』を初プロデュース。38歳のいま、映画プロデューサー、小説家、絵本作家として、ヒット作を連発する。映画は異なるジャンルの10数作品を続けて100万以上の動員に成功。昨年公開された『君の名は。』は日本だけで1900万人が鑑賞し、250億円の興行収入をあげ、邦画として歴代2位のメガヒットになった。小説は130万部を超えた、『世界から猫が消えたなら』など3作品を上梓し、絵本『ムーム』は米国で映画化されている。

上智大学新聞学科卒業で、時代の動きは新聞記事や広告からヒントを得ているという。「ありえない物語ではなく、みんなが感じているけれど、なぜか言葉になっていないものを、文章や映像にすることが僕の仕事」

©公益社団法人 日本記者クラブ

紹介 土生修一・日本記者クラブ専務理事・事務局長 これから総会記念講演会を始めたいと思います。本年は、映画プロデューサーで作家の川村元気さんをお招きしました。

日本記者クラブでは、毎年、メディア各社の編集幹部で構成する企画委員会で記念講演ゲストの人選を行っています。ことしも政財界のリーダーやノーベル賞受賞者など、多数の候補者が挙がりました。その中で、多くの委員から映画、小説でヒット作を連発する川村さんが、時代の流れをどうやってつかんでいるのか、ぜひ直接話を聞いてみたいとの声が上がって、ことしは川村さんに講演をお願いすることになりました。

川村さんは、1979年、横浜のお生まれで、上智大学文学部新聞学科をご卒業後に東宝に入社されました。映画プロデューサーとして、『電車男』『告白』『悪人』『モテキ』『バケモノの子』などの作品を制作され、特に昨年公開された『君の名は。』は興行収入250億円を記録しました。この数字は、これまで日本で公開された洋画、邦画を含めた全映画のうち歴代4位、邦画としては歴代2位の記録です。

さらに、近年は小説家としても『世界から猫が消えたなら』『億男』『四月になれば彼女は』の話題作を出しておられます。

それでは、川村さん、よろしくお願ひします。(拍手)

川村元気 はじめまして、映画プロデューサーで小説家の川村と申します。いつもよりシビアな目線をいただいている感じで、緊張しています。

簡単に自分の紹介をしたいと思います。映画プロデューサーで、小説家で、絵本作家という、いろんな肩書があります。横浜出身です。1979年生まれで、いま、38歳です。

ここが、ポイントだと思いますが、上智大学文学部の新聞学科を卒業しております。

もともと新聞が好きで、新聞記者になりたくて新聞学科に入ったのですが、僕が書く文章やつくる映像が、何かいつもおもしろおかしくしちゃうらしいんですよ。

僕は真面目にジャーナリズム、ドキュメンタリ

ーとしてやっていたりするんですけども、いつも先生に「君がつくるものはアジッているんだ。ジャーナリズムはそれじゃだめなんだよ」と言われて、その「アジッちゃだめなんだよ」の意味がよくわからないまま、いまに至ります。だから僕のいまやっている仕事は、アジッる仕事なのかもしれません。

自分の基礎はジャーナリズムにある

では、僕がジャーナリズムを忘れてモノをつくっているかということ、意外とそうではなくて、自分の基礎としてしっかりありながら、映画をつくったり、小説をつくったりしております。

『電車男』という映画で26歳のときにデビューしました。その後、『デトロイト・メタル・シティ』『告白』『悪人』『モテキ』『宇宙兄弟』『おおかみこどもの雨と雪』『寄生獣』『バケモノの子』『バクマン。』『世界から猫が消えたなら』『君の名は。』『怒り』『何者』『MOOM』、こういう作品をやってきました。

取りとめがないというのが映画業界で僕に対して言われる言葉なんです。本当にジャンルがばらばらで、キネマ旬報で1位、2位をいただいた『悪人』『告白』みたいな映画もありますし、『デトロイト・メタル・シティ』だったり『モテキ』みたいなコメディもありますし、最近だと『バケモノの子』『君の名は。』みたいなアニメーションもやっていますし、自分で原作を書いた『世界から猫が消えたなら』みたいなものもあります。

小説を3冊出しては、デビュー作は、2012年、マガジンハウスから『世界から猫が消えたなら』という小説を出しました。2作目が、「ブルータス」誌で連載した『億男』、3作目が、「週刊文春」で連載していました『四月になれば彼女は』。この3冊の小説を出しています。

絵本としても、カーサブルータスで連載した『ティニー ふうせんいぬのものがたり』という絵本がありまして、この絵本は、いま、NHKのEテレでアニメになっております。2作目の『ムーム』という絵本を白泉社から出したんですが、こちらの作品は、もともとピクサーでアートディ

レクターをやっていた監督たちにアニメ映画にしてもらいまして、いま、32 の映画賞を受賞しています。『パティシエのモンスター』という絵本も、マガジンハウスから最近出したところです。

対話集『仕事。』について

対話集、エッセーなども出しておりまして、『仕事。』という本を簡単にご紹介したいと思います。

12 人のいわゆる巨匠と言われる方たちに、当時、僕は 33 歳だったんですが「僕と同じ年のころ、何をしていましたか」というのを聞いて回った対話集になります。山田洋次監督から始めて、沢木耕太郎さん、杉本博司さん、倉本聰さん、秋元康さん、宮崎駿さん、糸井重里さん、篠山紀信さん、谷川俊太郎さん、鈴木敏夫さん、横尾忠則さん、坂本龍一さんと、12 人にインタビューをして回りました。

こういう方々は、成功してからの話を聞かれるのがほとんどなのですが、うまくいかなかったころの話だったり、悪戦苦闘していたころの話にも、きっと何かおもしろいヒントがあるのではないかなと思ったんです。実際、すごく有益な話をいっぱい聞けました。

続編対話集『理系に学ぶ。』の意図

『仕事。』の続編に当たる『理系に学ぶ。』という対話集、これはダイヤモンド社さんから出したのですが、メンバーは若田光一さんから始めて、ドワンゴの川上量生さんだったり、佐藤雅彦さんだったり、任天堂の宮本茂さんだったり、養老孟司さんだったり、マサチューセッツ工科大学メディアラボの伊藤穰一さんなど、そうそうたる理系のメンバーに参加していただきました。

僕は、新聞学科に入るということもあり、文系人間なんですよ。数学とか物理に対してコンプレックスがあって、いわば逃げ続けていまの映画とか小説の仕事に行き着いた人間なのですが、いま、世界を見渡すと、世界をドラスチックに変えているのは、スティーブ・ジョブズだったり、マ

ーク・ザッカーバーグだったり、基本的にはプログラミングだったり数学的なベースを持った人たちが多く、ここから逃げても変わらないだろうなと気づいたんです。彼らはストーリーテラーでもあり、アーティストでもあるという人たちなので、こういう理系脳を持った人たちに、この世界はこれから変わるのか、人間はどう変わっていくのか、何が必要とされて、何が不必要になっていくのか、そういう話を聞いて回るのがこの対話集でした。

空想会議『超企画会議』の出版

3 作目が『超企画会議』ですが、これはどういう本かというと、僕がハリウッドに行って、巨匠たち、ウディ・アレンとかスピルバーグとかと企画会議をするんです。もちろん、空想なんです。

ここでどういう手法をとったかということ、僕がスピルバーグなり、ウディ・アレンなり、タランティーノなり、ジェームズ・キャメロン、イーストウッドのインタビューを片っ端から読んで、この人たちがどういうことを発言しているか、どういう考え方で映画をつくってきたということを全部自分にインプットして、実際、自分がハリウッドに呼ばれてこの人たちと会議することになった場合にどうするか。

実際、彼らの事務所もインターネットで突きとめて、グーグルマップで空港からの彼らの事務所に行く道を全部インターネット上でみて、こういう道をたどって彼らの事務所に行って、こういうオフィスでこういう打ち合わせをしたら、きっと彼らはこういうことを言うだろう。それはもう予習済みなんです。

それに対して僕がこういうプレゼンテーションをするだろうという、空想をものすごくリアリスティックに突き詰めて、ただ、それをコミカルに描いたという、半分創作でありながら半分は本気企画会議という本です。

2016 年は、いろいろな作品をつくりまして、1 本目は『世界から猫が消えたなら』、自分が書いた小説が映画になりました。そして『君の名は。』がありまして、吉田修一さんが読売新聞に連載し

ていた『怒り』という小説が映画になりました。直木賞をとった浅井リョウさんの小説『何者』も映画に。『MOOM』というのは、先ほどの僕が書いた絵本がアメリカのクリエイターにより映画になりました。そして、小説『四月になれば彼女は』が出版されました。

全てばらばら、取りとめないようにみえつつも、僕の基本になるのは、何に気づくか、というところから始まっています。

小説にも「発見×発明」を応用する

オリジナルストーリー、小説だと、より僕の考え方が明快になると思っていて、それをお話できればと思います。原作があるケースが多い映画と違って、小説の場合は、テーマの「気づき」つまり「発見」の部分から自分でしなければいけなくて、その発見にクリエイティブの「発明」を掛け合わせて物をつくっています。

『世界から猫が消えたなら』という小説は、どういう発見でつくったかといいますと、一つは、小説と映画の違いへの興味というのがありました。『悪人』という映画をつくったときに、作家の吉田修一さんに、映画の脚本も書いてくださいとオファーしました。

そのときに最初に延々とやっていたことは、では、小説と映画、それぞれのメディアの表現の違いというのは何なのだろうということを話していました。では、小説でしかできないストーリーテリングとは何なのだろう、まずそこから始まりました。

『世界から猫が消えたなら』の場合

そのうえでクリエイティブの発明を掛け合わせていったのですが、その際古典性に必ず僕は戻るんですね。聖書の創世記というのは、神様が6日間かけて世界を1つずつ創造して行って、7日目に休むという物語です。この小説においては、余命わずかな男が1日を得るために世界から1つずつ物を消して行って、7日目に死んでいくとい

う物語にしようと決めました。

2つ目、発見した「小説でしか表現できない世界」というのはどういうことか、ということに対してのアンサーなのですが、「世界から猫が消えた」と文章で書くと、読者はその世界を文章から想像して脳内につくってくれます。けれども、映画の人間として、いまから「猫が消えた世界を映像にしてください」と言われたときに、途方に暮れてしまうわけですね。映像はそういう表現は苦手なんです。では、それを使って小説を書こう。

ただ、僕はそこに矛盾を必ずつくるんですが、そうやって映画が苦手な表現を使っているのに、世界観は極めて寓話的で映画的につくる。こういう矛盾が何か表現としてのおもしろさを生むのではないかなと思って書いたのが、この小説です。

結果、この小説は2013年に本屋大賞にノミネートされて、130万部を突破して、去年、映画にもなりました。フランス、ドイツ、中国、など全世界で翻訳出版がされています。

どんなテーマを発見するかということ。それに対してどんなクリエイティブの発明を掛け合わせていくかということ。この掛け合わせによって、ユニバーサルなテーマにしようとするのが僕のつくり方ですので、それがうまくいった形かなと思っています。

『億男』完成までのプロセス

『億男』という2作目の小説も似たようなプロセスがありました。

1つ目の、発見。最初に気づいたのは、お金のエンタテインメントが小説にも映画にも見当たらない。切実なテーマなのに、そこにチャレンジしているものが少なく「空き地状態」だなということでした。

僕はもともと伊丹十三監督の『マルサの女』という映画がとても好きで、あれはお金そのものに踏み込んだエンタテインメントだと思うんですが、その後の日本のエンタテインメントは、基本的にはマネートレードとか、銀行の話だったりとか、そっちのほうなんですよね。お金そのものの

エンタテインメントがない。

書店に行って、いろいろ調べたんですけども、「お金持ちになる方法の本」はたくさんあるんですよ。けれども、本当にみんなお金持ちになりたいのだろうか？と、そのときに思ったんです。知りたいのはお金持ちになる方法ではなくて、幸せになる方法なんだけれども、それが無い。

さらに書店をみながら気づいたことが3つあって、大体この3つの本が多いんですよ。死—健康とも置きかえられますけれども、恋愛、お金。この3つは、どんなに人間が学んで賢くなってもコントロールできないものである。だからこそ、これは小説で書くべき切実なテーマなのではないかなと思うようになりました。

ただ、この死と恋愛とお金のうち、お金だけがほかの2つと異なることがあることに気づいた。これはちょっとネタばれになるので、ここでは話せないんですが、小説の中でそれをメインテーマとして書こうと思いました。

では、それに対してどうエンタテインメントにしていくかという「発明」のプロセスの中で、やっぱりお金を使って人間を描くことがメインなのだということに気づいていきました。お金にまつわる人間の不思議な行動というのはたくさんあります。それを描いていけば人間そのものがみえてくるのではないかと思います。

2つ目ですが、これもすごく取材活動的なんです。偉人たちのお金に対する名言というのをとにかく調べたんですよ。そうすると、ソクラテスからドストエフスキー、アダム・スミス、ジョン・ロックフェラー、ドナルド・トランプ、ビートルズ、チャップリン、ビル・ゲイツ、本当にいろんな人がお金に対していいことを言っているのですが、彼らもお金に振り回され続けた人生だったりもする。

小説の冒頭とかにも書いているんですが、チャップリンの『ライムライト』という映画で、「人間に必要なもの、それは勇気と想像力とほんの少しのお金だ」というせりふがあるんですが、いいせりふだなと思ってチャップリンの歴史を調べてみると、彼がこのせりふを書く数年前に年間9億円の契約金を手に入れているんですよ。彼が

そのときにしたことというのは、ニューヨークの街角にたたずんで、ただ呆然としていた。どうやってこれからモチベーションを持ってモノづくりをしていったらいいのか、わからなくなってしまったのだと思うんですよ。

事ほどさように、やっぱりその名言そのものに意味があるのではなくて、その名言の裏側にある人間の心理、行動みたいなものを描いていったらおもしろいのではないかと思います。

ただ、そのままですと、かた苦しい、エンタテインメントでない物語になってしまうと思ったので、7章立ての物語にしまして、一男、九十九、十和子、百瀬、千住、万佐子、そして億男という7章立てで、頭文字をとっていただくと、一、九、十、百、千、万、億と並ぶ目次にしています。こうすることで、何か変な物語なんだなというのが感じていただけるかなと思います。

僕はそうやって、入り口のエンタテインメント感と、中身の苦さだったりとか複雑さがあるもののコントラストでつくることが多いので、これは代表的な作品のつくり方かなと思っています。

この作品も本屋大賞にノミネートされまして、16万部を突破して、中国、韓国、台湾でも出版されて、中国での映画化がいま進んでいます。

お金に対しての僕が感じていた違和感みたいなものは、きっと北京でも、ニューヨークでも、ロンドンでも、一緒なのかなと思いました。絶えず自分はそこを描きたいなと思っています。

『四月になれば彼女は』は取材を基に

この次の『四月になれば彼女は』という3作目の小説も、やっぱり似たような部分があって、これも膨大な量の取材に基づいた小説になります。

まず、テーマの発見の部分で、「死とお金と恋愛の3つをテーマにしたいんです。だから、最後は恋愛を書こうと思います」と言ったら、周りの編集者がみんな、「大人の恋愛小説は最近売れないですよ」と言う。その言葉に違和感があったんですよ。『ノルウェイの森』、『冷静と情熱のあいだ』みたいなヒット作があって、でもその

一大ジャンルが売れなくなっている。

なので、取材してみました。100人以上の30代から50代の人たちに、単純に「恋愛していますか」という質問をしたんですね。そうしたら、独身の人は「好きな人ができない」「結婚すべき相手がみつからない」と言うんですね。結婚している人に聞くと、「結婚すると愛が情に変わっていく。それが家族になるということだよ」とみたいな話をみんな当たり前のようにしゃべるんですけども、それで本当にいいのだろうかとか、みんなこんなテンプレートな回答をしている状況に対して、すごい不気味だなと。

誰も熱烈な恋愛をしてない。恋愛から、全力で目を背けて生きている。小説に書くべきテーマがみつかったなと思ったんですね。

そのときに、1番の答えがみえたんですね。つまり、男女が恋愛するという前提に基づいて、『東京ラブストーリー』であり『ノルウェイの森』は描かれていた。けれども、もう前提が変わっていて、男女はなかなか恋愛できないというのがいま現在の前提である以上、例えば男と女が出会って恋に落ちるといった物語はもはやファンタジーでしかない。

とはいえ、恋愛感情というのは本当に人間から消えてしまったのだろうか、というのがメインテーマになるなと思って、「クリエイティブの発明」作業に入りました。発明作業の背骨になったのは、「ラブレスなラブストーリー」ということでした。恋愛をしている人たちを描くのではなくて、恋愛をできなくなった人たちがそれを取り戻そうとする話。

恋愛ができなくなったと言っている人たちも、学生時代の話を知ると、すごく熱烈な恋愛をしているんですね。嫉妬に苦しんだりとか、失恋で呆然としたり。その人たちが20年、30年で、全く別人のように恋愛から切り離されて生きているということ。その差を交互に書くことで、その差分が恋愛をかたどるのではないかと思います。

2つ目は、向田邦子さんの小説を読んでいて気づいたことなんですが、向田邦子さんはドラマの脚本家なんですね。で、僕も映像の人間として、

向田さんの小説を読んでいると、カット割りが完全にみえる。こういうカット割りでこういう音楽をかけて、このシーンを撮っているなというのがみえるんですね。

では、僕も、カット割りとか、カメラアングルとか、ここからここまで映画の劇伴が流れるということを決めてから文章を書こう。そうすることで何か新しい表現というものが生まれませんか、ということにチャレンジしています。

3つ目は、自分が何を描いていこうか、何が一番メジャーな共通言語として届くのだろうかということについて、「幸福論」だろうなということに気づきました。ずっと死とか、お金とか、恋愛とかを描いてきましたが、基本的には人間がそれを通じて何を幸せだと感じるのかということに行き着くんです。

結果、この本も、昨年11月4日に発売になって、自分の中では最速のスピードで売れていて、12万部を突破して、いまなお順調に売れています。

集会的無意識を探す

最後にお話ししたいと思うのが、僕は上智大学の新聞学科というところでジャーナリズムを学んで、先ほど言ったように、先生にダメ出しされて挫折した口なのですが、何かをつくるということよりも、何かに気づくということがはるかに大事だなと思っていて、僕はジャーナリズムの精神というのはそういうことだと思っていて、いまだにその精神でモノをつくっています。

僕はみんなが感じているのにまだ表現されていない「集会的無意識」に気づくところからものづくりをはじめます。『仕事。』という本で、谷川俊太郎さんと対談したときに教えてもらった言葉なんです。詩人という職業で90歳近くまで一線に居続けるというのは奇跡だと思って、「どうしてそんなに一線にい続けられるんですか」という質問をしたんですけども、「集会的無意識にアクセスしたいと思っているんです」というのが谷川さんの答えだったんですね。

だから、谷川さんは歌詞を書いても、詩を書い

ても、絵本を書いても、多くの人に届く。

集合的無意識に気づいて、それを自分の「違和感ボックス」の中に入れて、それらの発見に、クリエイティブの発明を組み合わせつつっていく。それをひたすら繰り返しているというのが僕のつくり方です。

そういう意味では、僕は新聞や雑誌をすごく大

事にしている、自分が書店に行ったり、新聞を読んでいて、関係なく——関係なさそうで関係があるからひっかかるわけですが、情報にひっかかって、こうやってアイデアをためていくので、何か創作の糧というものを新聞や雑誌からいつもいただいているんです。

本日はどうもありがとうございました。(拍手)

(文責・編集部)